

令和八年度 第一学期終業式 校長講話

生徒の皆さんおはようございます。早いもので今日は第一学期の終業式です。今年も折り返し地点を過ぎました。この3か月半の自分自身の取組はどうだったでしょうか。自己採点すると何点でしょうか。まずは足りなかった部分、補強すべき点をしっかりと洗い出し、行動に移してください。

私自身を振り返ると、避難訓練で皆さんにお話しをした「備えよ、常に」を意識する1学期でした。5月には福島で部活動遠征のバス事故があり、6月に2回大型台風が接近したり、地震が頻発したり、東京の小学校では火災がおきたりと、学校の管理責任者として、自分ならどう対応するか、危機管理を考える日々でした。ちょっと古い話ですが、思い返すと昨年度の今年を表す漢字は「熊」でした。動物の名前が選ばれるというのは、私の記憶ではちょっと無いのですが、それだけ熊による被害が全国的に拡大し、現在も大きな問題になっています。実際に埼玉でも熊が出るところはあります。あらためていろいろなことに備えることの重要性を再認識します。皆さんも自分事として様々な事象をとらえる習慣を身に着けて欲しいと思います。

さて、昨日ですが、1987年にノーベル生理学・医学賞を受賞した利根川進博士が亡くなったというニュースがありました。分子生物学や免疫学はもとより、脳科学や神経科学でも活躍された先生です。当時私はちょうど皆さんと同じ高校生で理系クラスにいました。初めてマサチューセッツ工科大学(MIT)という名を知ったのもこのときです。利根川先生の研究の詳細は到底わかりませんが、このとき以来代々の日本人ノーベル賞受賞者がどんなことばを残すのかに興味をもって聞いてきました。

昨年のノーベル化学賞を受賞した京都大学の北川進博士が授賞式に先立ち、ストックホルムにおける記念講演で「無用の用」ということばを紹介しました。北川先生は学生時代からこのことばを「座右の銘」としてとても大切にし、このことばは研究にも大変影響を与えてきたとおっしゃっていました。このことばの意味は「一見役に立たないと言われるものが大きな役割を果たしている」ということです。中国の思想家である荘子のことばです。言い換えれば「無駄なものはない」、いや少なくとも「無駄ではない」その可能性を秘めている、ということです。皆さんも学校の授業や実習でなぜこれを学ぶのか?と思った経験はあるでしょう。私も高校時代苦手教科を勉強するときに(ちなみに物理でした)いつも思っていました。でも、後々振り返って実は自分にとっても意味があった、大

切なものだった、大切な機会だったということがきっとあるはずなのです。

「コスパ」とか「タイパ」などということばに示されるように、現代に生きる私たちは、とにかく効率を重視しがちです。もちろん無駄は無くしていくべきですが、最初から効率のことばかり考えると本質的なことを見誤る可能性があるのではないのでしょうか。ノーベル化学賞を受賞した北川先生は、昨年医学賞を受賞した大阪大学の坂口先生とともに基礎研究の大切さを繰り返し説いておられました。これは役に立つ、もしくは役に立ちそうなものだけ研究する、そんな効率重視のスタンスだけでは駄目だ、急がば回れ、ということなのだと思います。私たちはこのような警鐘を真摯に受け止めねばなりません。そして高校生としてこれから志望する大学受験に臨むからには、基礎基本を大切にしながら好き嫌いをなく学習することが大切だと思います。

「無用の用」ということばをあらためて考えてみると、あらゆるモノや機会、場面を冷静に受け止めること、そしてその経験たちをその後に活かすという非常に前向きで能動的な、実は「気持ちの持ちよう」なのではないかと考えます。そして「無用」と判断した理由は、あくまでその判断をくだした時点での考えに過ぎないということもあわせて認識すべきです。

知っていたようで新たな気づきのある「無用の用」について、生徒の皆さんも是非考えて欲しいと思います。

明日から四十日あまりの夏休みに入ります。自分自身の夏の目標をしっかりと立てて一日一日大切に過ごしてください。生徒の皆さんにとって実りの多いチャレンジング夏にして欲しいと願っています

話は以上です。暑い夏です。事故にはくれぐれも気を付けて2学期も元気な姿でお会いしましょう。終わります。

令和八年七月十七日
さいたま市立浦和高等学校長
齋藤 潤